

Title	彙報 二〇一二年一月より二〇一二年十二月まで
Author(s)	
Citation	東方學報 (2013), 88: 555-577
Issue Date	2013-12-20
URL	https://doi.org/10.14989/180557
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

彙報

二〇二二年一月より
二〇二二年十二月まで

研究班

公募型研究班
グローバル化する思想・宗教の重層的接觸と人文
學の可能性
班長 奥山 直司

本年、本共同研究班は公開講演會を一回、研究會を四回開催した。そのうち第八回研究會は二泊三日の研究合宿であった。本研究班では当初一月中旬に外國人研究者を招聘して講演會・研究會を行う豫定で準備を進めていたが、先方のやむを得ない事情によって計畫を變更した。これに替わるものとして、二〇一三年三月上旬に別の外國人研究者を招聘して、公開講演會と研究會を開催する豫定である。

一月二一日 公開講演會

テーマ「開發僧―タイ佛教と地域開發」

講演①…プラユキ・ナラテポー
(タイ・スカトー寺)「タイ開發僧との出會いから出家へ、そして自他の心の開發へ」
講演②…泉經武(東京成徳大學)「『開發の時代』とタイ佛

教」
(コメンテーター…ロバート・

ロース(大谷大學)
二月二一日～二二日 第八回研究會(高野山合宿)

二月二一日 講演①…日野西眞定(高野山大學名譽教授)「高野山の民俗」
研究發表①…谷口眞梁(高野山眞言宗總本山金剛峯寺國際局)「國際布教」(コメンテーター…福西加代子(京都大學大學院人間・環境學研究科博士後期課程))
研究發表②…沼野圭翠(香川縣天皇寺高照院)「遍路―つながる―」(コメンテーター…奥山直司(高野山大學))

二月二二日 講演② 藤田光寛(高野山大學)「高野山の歴史と文化」
研究發表③ アンドレア・デアントーニ Andrea De Antoni(京都大學 人文科學研究所研究員)「あの世から心霊スポットへ?―現代恐山における體驗とモノのエンジェンシーをめぐって」(コメンテーター…山下博司(東北大學))

研究發表④ 河西瑛里子(京都大學大學院人間・環境學研究科博士後期課程)「現代の歐米の女神運動にひかれる人たちが―イギリス、グラストンベリーの事例から」(コメンテーター…萩原卓也(京都大學大學院人間・環境學研究科博士後期課程))
五月一九日 第九回研究會
吉永進一氏(舞鶴工業高等專門學校)「原擔山再考 佛教と生理心理學」
陳繼東氏(青山學院大學)「近代中國における進化論の批判―章炳麟と李春生の場合」
第一〇回研究會
阿滿道尋氏(アラスカ大學)「第二次大戰前の北アメリカにおける日本佛教の近代的發展」
第一一回研究會
瀧澤克彦氏(東北大學專門研究員)「進化論における宗教進化の位置とその影響」

六月三〇日

三年間の總括
本共同研究班は、二〇一三年三月までの残され

三年間の總括
本共同研究班は、二〇一三年三月までの残され

た研究期間内に、さらに研究会を三回（うち一回は二泊三日の研究合宿）、外国人研究者の招聘による公開講演會を一回豫定しており、研究活動の學術的な總括は、これらを通して行うことにしている。そこで以下では、二年九カ月にわたる本研究班の活動を振り返り、その概略を述べることにしたい。

われわれの研究目的は、グローバル化の進行する現代社會において思想や宗教の流通と消費にどのような特徴があるのかを、複數文化の重層的接觸という観点でとらえ、現代のみならず、過去一五〇年程度のスパンでこれを分析、考察することであった。そのための柱として宗教と進化論（ダーウイニズム）をテーマに据え、それらの傳播の諸相を人文學の諸分野にわたって検討することに努めた。また宗教と進化論の傳播というテーマを共通の廣場として、専門を異にする研究者が發想型で自由に意見を交換し合うことを通じて、包括的な視點の獲得を目指した。

このような構想の下、本研究班が實施した研究会は、今後の豫定も加えると一四回（うち二回は二泊三日の研究合宿）、公開講演會は三回を數える。報告者・講演者は延べ三四人、コメンテーターとしての参加者は延べ一四人である。また奥山直司による人文研アカデミー講演（二〇一二年五月一八日）も本研究班の研究目的に沿ったものである。これらの報告・講演を通じて上述のテーマをめぐって多様な視點が提供された。それらをトピックの内容ごとにグループ化するとおおよそ次

のようになる。

(一) 宗教のグローバル化の事例
 アーユルヴェーダの世界的な傳播、シンガポールのヒンドゥー教寺院の變容、グライ・ラマー一世の思想と行動、現代歐米の女神運動などを事例として、グローバル化の進行の中で宗教に起きているさまざまな事象が紹介・検討された。

(二) 複數文化の接觸による宗教變容
 明治のセイロン留學生の異文化體驗、アメリカにおける日系佛教の歴史的展開、ヒンドゥークシユ南北におけるイスラームとインド宗教の接觸、明治の佛教者原擔山の佛教哲學における生理・心理學の導入などが複數文化の接觸という観点から分析された。

(三) エンゲイジド・ブッディズム
 エンゲイジド・ブッディズム (Engaged Buddhism) は一九六〇年代にベトナムで提唱され、その後世界各地に廣まった佛教運動であるが、研究者は、現代の佛教者による反戦平和、環境問題、差別や壓政からの解放などに關わるさまざまな實踐をエンゲイジド・ブッディズムの名の下に一括する傾向がある。本研究班では、エンゲイジド・ブッディズムの定義とその課題が總括的に議論されたことを皮切りに、B. R. アンベードカルの佛教改宗と現代インドの佛教運動、カンボジアにおける佛教系諸團體の活動狀況、タイの開發僧などがトピックとして取り上げられた。

(四) 進化論の傳播

進化論の傳播とその影響が、日本の近代美術、近代中國思想などの分野において検討された。また進化論における宗教進化の位置付けとその影響が概括的に論じられた。

(五) その他

シンクレティズム論の再考、恐山を例にした聖地の心靈スポット化、佛教の國際布教の問題點、四國遍路の現状報告など

以上のうち(三)のエンゲイジド・ブッディズムは(一)(二)のような研究を進める中、それとの關係で新たに視野に入ってきたテーマであり、今後深められるべき方向の一つを示していると考えられる。

情報處理技術は漢字文獻からどのような情報を抽出できるか・人文情報學の基礎を築く

班長 山崎 直樹

前年度のシンポジウムでの報告と議論より、「ネットワーク解析技術の人文科學への應用」は、検討する價値のある課題であるとの認識が得られた。そこで、本年度は、「ネットワーク構造の物理モデルへの基本的理解」「大規模ネットワーク分析の人文科學への應用」をテーマに、下記の公開セミナーを開催した。

公開セミナー『ネットワーク科學は道具箱』

(一) ネットワーク解析の道具を理解しよう／藤原義久(兵庫縣立大學シミュレーション學研究科)

(二) 大規模社會ネットワーク分析の事例と展望

／湯田聰夫（株式會社CREV）

(一)では、ネットワーク構造の物理モデルに關する初歩的な知識（グラフ構造・探索の基本など）から高度な内容（次數・相關・推移性などの統計的な性質や、媒介中心性やコミュニティの構造など）について、まず學び、その後、(二)で、大規模ネットワークに關する研究の應用例（コミュニティ抽出の實例など）までを學んだ。参加者は、人文科學におけるネットワーク科學の應用について、一定の見通しを得ることができた。

この公開セミナーの全容は、下記で視聽できる。
人文：USTREAM

<http://ustream.tv/channel/zinbun/>

本プロジェクトがその目的に掲げている「人文情報學の基礎を築く」に關して、昨年のシンポジウムに引き續き、「テキストとはどのような構造をしているのか、それはどのようにモデル化できるか」「人文學で扱う情報とはどのような構造をもつか、それはどのように扱うべきか」の諸點について、各分野の現状と今後の展望について、さらに理解を深めるべく、左記の公開シンポジウムを開催した（※印は當研究プロジェクトのメンバーによる報告）。

公開シンポジウム『情報の構造とメタデータ』
(一) マンガにおける異本研究／安岡孝一（京都大學）※

(二) T E I テキスト・モデルの今昔／
Christian Witten（京都大學）※

(三) 漢字文獻における電子的翻刻の課題—或いは翻刻者の使命／白須裕之

(四) C I I のメタデータ・デザイン／大向一輝
（國立情報學研究所）

(一)は、従来、構造化が困難であると考えられていた文字と畫像が非線形に展開する資料をどのようにマークアップすべきかという課題に取り組んだものである。

(二)は、「テキストの構造化」といえば必ず言及されるT E I（Text Encoding Initiative）が、テキスト構造をどのようにモデル化してきたか、その變遷と現状の報告である。

(三)は、漢字文獻を電子化する際に問題となる「情報の劣化」という側面に對し、「圏論（Category Theory）」の立場から、新しいテキストモデルの提出を試みたものである。

(四)は、近年、その高度な検索性能で話題になることが多い、國立情報學研究所の圖書・論文検索サービス「C I I」がどのようなメタデータデザインを行っているかに關して、その設計擔當者からの報告である。

このシンポジウムでの議論を通じて、テキストのモデル化にあたっては、確固たる理論的基盤が必要であること、また、データを相互に關連させる手法としてのLinked Open Data (LOD)にも關心を拂う必要があることを學んだ。

當年の公開シンポジウムの豫稿集を、『情報の構造とメタデータ』（全國共同利用・共同研究據點「人文學諸領域の複合的共同研究國際據點」、京都、二〇一二年二月）として發行した。このシ

ンポジウムに關する諸情報は、下記の「一」で、また、シンポジウムの各報告の映像記録とパネルディスカッションの映像記録は、「二」で手に入られる。

「一」 <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

[/ymzknk/kanzi/](http://ymzknk/kanzi/)

「二」 人文：USTREAM

<http://ustream.tv/channel/zinbun/>

生命知創成に向けたプラットフォームの構築

班長 小林 傳司

生物學研究は、一九七〇年代を起點として、實驗室に閉じたかたちで營まれていた自然哲學的色彩を伴う研究から、醫學領域のみならず人々の日常生活における生と死の領域全般に具體的な影響を持つ生命科學へと變容を遂げた。このような科學の構造轉換の状況において、生命科學を社會の中にあらためて位置づけ、社會の視野を加味した新しい「知」として把握しなおすことが必要である。本研究班では、このような社會的視野と見識を備えた生命の科學に關する新しい捉え方を「生命知」と呼ぶこととし、その創出のために、科學者、社會學者、人類學者、哲學者、歴史學者などが共同で検討を行うことを目的とした。

平成二二年七月から二四年一二月まで總計一三回の研究會（うち三回は公開研究會）を行い、生命科學系、人文系の兩方の立場からの報告を聞き、検討を行った。また、二回の公開シンポジウムと二回の公開セミナーを開催した。全體を通して明らかになったことは多岐にわた

るが、一つには、生命科学の先端研究の現状についてより認識を深めることができたことがある。生命科学の研究現場では、数学や物理学、工学などの、これまでになかった分野との交流や共同研究が本格的に行われ、個別生命現象の理解は進んでいる。その一方で、「生命らしさ」の解明を含む、生命現象の本質に迫るには、いまだ研究者は試行錯誤していることも明らかになった。また、社会との関わりが大きくなってきていることも、豫想通りとは言え、再生医療や脳科学といった具体的な領域を事例に明らかにすることができた。生命科学の研究者自身が自らの研究が生み出す倫理的・社会的課題に取り組みという動きがあることも知ることができた。

三年間を通して、生命科学系の現場にいる人々と人文系の研究者がともに検討するという当初の目的はある程度達成できたと言える。今後は、この活動を踏まえてさらに多様な研究者、専門家、その他の人々が参加できる場を作ること計畫している。

一月二三日 第三回研究会

話題提供「最近のライフサイエンス研究の動向について」

加藤 和人

会場：京大人文研本館三階三三〇号室（セミナー室三）

二月 八日 合同セミナー

立命館大学衣笠キャンパス創生館四階四一にて

（平成二二〜二四年度日本學術振興會科學研究費補助金「基盤研究（B）」、科學の參謀本部「ロシア／ソ連邦／ロシア科學アカデミーの総合的研究」

（研究代表者：市川浩、立命館大學グローバルCOE「生存學」創成據點／立命館大學生存學研究所共同研究「生命知創成に向けたプラットフォームの構築」（代表：小林傳司）共催）
 （一）講演「冷戦初期の科學と權力／ソヴィエト遺傳學の大轉換をめぐって」
 キリル・ロシヤノフ（ロシア科學アカデミー・自然科學史・技術史研究所）
 （二）コメント：藤岡毅（同志社大學囑託講師）

三月二五日

第四回研究会（公開研究会として開催）

京大人文研本館三階三三一號室にて

研究報告「生命科学技術のデュアル・ユースと倫理／バイオセキュリティ教育及び、デュアル・ユース研究についての最近の話題」

四ノ宮成祥（防衛醫科大學校・分子生體制御學講座）

七月 二日

第一回研究会（公開セミナーとして）

九月一七日

第二回研究会
 研究報告「動物の體のパターン形成」

一〇月一五日

第三回研究会
 研究報告「日本と科學の厳しい現状と問題點、そして科學者が果たすべき役割」

一一月一九日

第四回研究会
 研究報告「再生醫療という文化・STSの視點から」

一二月二〇日

第五回研究会
 獨立行政法人理化學研究所神

戸研究所 發生・再生科學總合
研究センター(理研CDB)に
て

(一) 研究所見學

(二) 研究報告「合成生物學に
よるライフ・イノベーション
『細胞を創る』から『個體を創
る』へ」

上田泰己(理化學研究所・發生
再生科學總合研究センター)

ヨーロッパ現代思想と政治 班長 市田 良彦

二〇一一年四月に發足した公募研究班A班
「ヨーロッパ現代思想と政治」では、二〇一二年
一月から二月までの間に、以下の六回の研究會
と一回のシンポジウムを行なった。

二月 四日 長原豊(法政大學教授)「DING

／M試論ver.二」(ドゥルー
ズリガタリとマルクスの信用論
再検討)

多賀健太郎(翻譯家)「政治と
媒介―戦後ドイツにおけるアド
ルノ」

二月 五日 人文研アカデミーシンポジウム

「日本から見た六八年五月」長
崎浩(評論家)、西川長夫(立
命館大學名譽教授)、安丸良夫
(二橋大學名譽教授)、上野千鶴
子(東京大學名譽教授)、伊藤
公雄(京都大學教授)、中島一

三月一日

夫(近畿大學准教授)、市田良
彦(神戸大學教授・司會)
布施哲(名古屋大學准教授)
「ポストマルクス主義」とラク
ラウ

中村勝己(中央大學非常勤講
師)「オペライスタはプロレタ
リア革命の夢を見たか―一九七
〇年代のトロントイ、ネグリ、
カッチャーリの文獻を読む」

四月二一日

「市田良彦著(平凡社新書)『革
命論』マルチチュードの政治哲
學序説をめぐって」合評會
市田良彦・國分功一郎(高崎經
濟大學准教授)・小泉義之(立
命館大學教授)

七月二八日

長崎浩「初期ルカチと政治」
伊吹浩一(専修大學非常勤講
師)「アルチュセールにおける
政治をめぐって」

九月二九日

立木康介「精神分析家の養成・
組織・分派」

松本潤一郎(翻譯家)「労働者
の政治―言語的觀點から見た二
〇世紀マルクス主義の傾向瞥
見」

一二月 一日

王寺賢太「ネグリ／ポロコック
『構成的權力』と『マキア
ヴェリアン・モーメント』につ

いてのメモ」

箱田徹(立命館大學PD研究
員) [Foucault, Mal faire, dire
vra (二〇一一) 前半部を中心
とした一九八〇年代フーコー統

治論の概観」

このうち、京都大學百周年記念時計臺記念館で
昨年二月五日に開催されたシンポジウムは、西川
長夫「バリ五月革命私論―轉換點としての六八
年」(平凡社新書)の發刊を記念して行なわれた。
世代と立場を異にする六人のパネラーを招き、西
川氏が現地でも直に経験したフランスの六八年五月
と、同時代の日本の経験、さらに「六八年」に象
徴される政治的・思想的な變動の歸結を現時點か
ら批判的に再検討しようとしたこのシンポジウム
は、五〇〇人近い聴衆を集める大盛會で、毎日新
聞での新聞報道も受けた。また、このシンポジウ
ム開催を契機として、西川長夫氏が収集されてき
た六八年五月の原資料(諸黨派・學生小集團のピ
ラ・機關誌)・研究文獻などのコレクションが人
文研に寄贈されることになった。このうち一部に
ついては、研究班の事業としてウェブ上で公開す
べく、現在準備を進めている。

このシンポジウムにも見られるように、本研究
班の目標は、「現代思想」・「ポストモダニズム」
として知られる六〇年代以降の西歐の思想的潮流
を、その政治的な性格に焦點を當て、スターリン
批判以後、六〇年代以來の正統派マルクス主義に
對する批判の文脈に位置づけることにある。この

觀點から、市田良彦は、二〇一二年二月に『革命論—マルチチュードの政治哲学序説』（平凡社新書）を公刊し、おおよそアルチュセルからフーコー、ドゥルーズをへて、ネグリ、バディウ、アガンベンらにいたる現代思想の諸潮流の見取り圖を描いた。ここでは、正統派マルクス主義の史的辨證法と「経済主義」・「労働者本體論」に對して、歴史における「偶然性」や「出来事」の意義を強調するアルチュセルおよびバディウや、政治における「主體化」の意義を強調するドゥルーズやネグリが位置づけられ、さらにこのポスト・マルクス主義的な地平で、あらためて政治—經濟を總體的に捉え直す理論的な端緒を示すものとして、フーコーの生政治論が考察されている。二〇一二年四月二二日の公開研究會は、本研究班の叩き臺となるこの著作の合評會として行なわれた。

以上の問題設定を踏まえ、二〇一二年の共同研究班例會では、一〇名の班員が研究発表を行なった。焦點となったのは、六〇年代から七〇年代にかけてのフランスの思想的動向だが、このフランスのコンテクストを相對化し、汎ヨーロッパ的・世界的な視野で問題を捉えるためにも、それ以前のドイツ語圏でのマルクス主義の動向（ルカーチからフランクフルト學派まで）、ネグリを生み出した七〇年代イタリアの労働運動の變貌についての報告は貴重であった。また、本研究班では、とくに「主體」・「主體化」の問題系に關連して、アルチュセル派のマルクス主義とも強い關係を持ったラカン派精神分析の理論・實踐の動向を視

野に入れている。他方、七〇年代以來の「現代思想」と政治との關わりを見極めるためには缺かせない、現代政治哲学の諸潮流（ラクハウのラディカル・デモクラシー論やポーコックの共和主義論など）との比較検討も提起された。さらに、本研究班では、正統派マルクス主義批判以後の新しい政治經濟（學）批判のモデルを「現代思想」の残した業績から、理論的に展開しようとする試みも現れている。

本年の研究會は、總じて、共同研究の成果を以下の諸點に留意しながらまとめる方向づけを與えるものであった。

- ① 六〇年代以前の非正統派マルクス主義の理論と「現代思想」の關連を明らかにすること。この點に關しては、とくに「史的辨證法」・「経済主義」ないし「労働者本體論」・資本主義先進國中心主義などの批判に留意する。
- ② 「現代思想」内部における政治と「主體」の問題系の關連を明らかにすること。この點に關しては、六〇年代から七〇年代にかけてのアルチュセル、フーコー、ドゥルーズらとラカン派精神分析の合流と分岐に留意する。
- ③ 「現代思想」諸潮流と、一九八九年のソ連崩壊以後隆盛を極めている現代政治哲学の諸潮流（政治的自由主義・共和主義・さまざま「民主主義論」）との異同を、七〇年代以來の兩派の展開に即して明らかにすること。
- ④ ポストマルクス主義の時代（脱産業化、グローバル化、情報社會、金融資本主義の新たな展開）を踏まえた新たな政治—經濟學批判の理論的モデルを「現代思想」の成果（ドゥルーズ・ガタリの資本主義論、フーコーの生政治論）を繼承・發展しながら構築すること。

なお、本研究會は二〇一四年三月までの三年間の豫定で始まったが、豫算の限定もあり、これまで十分な回数の研究會を開催できなかった（ほぼ年五、六回のペース）。このため、来る二〇一三年度には二〇一四年度一年の延長を申請する豫定である。この延長が認可された際には、二〇一四年度の研究班運営はできなかり現在申請中の科研究費でまかない、共同研究の締めくくりとして、スラヴォイ・ジジェク（スロヴェニア）、ヤン・ムリーエルブタン（フランス）を招聘し、大規模な國際討論集會を開催したいと考えている。

東方學研究部
班長 高田 時雄
中國中世寫本研究

本研究班では、敦煌・トルファンおよび東トルキスタン各地の遺蹟から發見された古寫本に加え、日本國內の寺社及び圖書館、博物館等に所藏される日本古寫本を對象として、より廣いパースペクティブの中で中國中世におけるテキストの傳播と變遷を考察しようとするものである。初年度の報告は二〇一二年三月に『敦煌寫本研究年報』（第六號）として刊行されたほか、新年度の例會には以下の報告を得た。

四月二三日
道坂 昭廣 日本古抄本《王勃集》について

て

五月 七日

山口 正晃 敦煌契約文書における関係者の續柄表記について

林 生海 唐代遺書分家之研究―以敦煌寫本羽五三號《吳安君遺書》爲中心

五月二一日

白石 將人 書道博物館藏『春秋左氏傳』殘卷に見える新出『左傳』服虔注に就いて

玄 幸子 『閻羅王授記經』と『金剛經』―何故竝寫されたのか

六月 四日

岩尾 一史 古代チベット帝國の敦煌支配と寺領・O r. 八二二〇/S. 二二二八の検討を中心に

徐 銘 敦煌本讀文類小考―唱導、俗講、變文との關わりより

佐藤 禮子 羽〇九四R―「(擬)天臺智者大師智顛別傳」について

六月一八日

藤井 律之 五胡十六國霸史輯佚補遺

山本 孝子 敦煌吉凶書儀に見る官僚らの公私書札禮―書簡文の實例との比較を通して

報 彙

中村 友香 『搜神記』諸テキストに関する一考察

七月 二日

大西磨希子 西方淨土變の白描畫 Stein painting 七六、P. 二六七一の解釋について

赤木 崇敏 敦煌王の婚禮―榮親客目からみた一〇世紀敦煌社會

高井 龍 舌による開眼故事について

七月一六日

劉 安志 關於敦煌文書P. 二六二五號寫本研究的幾個問題

辻 正博 羽〇四三醫方文獻初探

坂尻 彰宏 公主君者者の手紙―S. 二二二四一の受信者・發信者・作成背景について

さらに二〇一二年七月七日に國際シンポジウム「敦煌寫本と日本古寫本」を開催し、以下の研究發表および討論を行った。

高田 時雄 敦煌寫本與日本古寫本―代開幕辭

七月 七日

王 三慶 日本國聖武天皇雜集與敦煌寫卷相關内容之比較研究

鄭 阿財 論日本藏敦煌寫本及古寫經靈驗記的價值

朱 鳳玉 敦煌《妙法蓮華經講經文》(普門品) 殘卷新論

荒見 泰史 敦煌本孝子故事類の展開と日本殘存資料

定 源 敦煌本『四分律比丘含注戒

本』の研究―特に系譜と成立に關して

永田 知之 『琉璃堂墨客圖』覺書

以上の論考は、二〇一三年四月刊行の『敦煌寫本研究年報』(第七號)に掲載された。

漢簡語彙辭典の出版 班長 富谷 至

前年度に續き、居延舊簡・新簡を中心としつつ、敦煌漢簡・額濟納漢簡中の語彙もあわせて検討し、語義を確定した。また、居延舊簡の語彙はほぼ取り終え、新簡のみに見える語義の検討へと移行する豫定である。本研究班で確定させた語彙数は、二〇一二年末の時點で、約五四〇〇項目となった。二〇一二年の擔當者は次の通りである(排列は擔當順)。

吉村昌之、辻正博、大川俊隆、鷲尾祐子、土口史記、井波陵一、劉欣寧、陳捷、門田明、吉川佑資、佐藤達郎、鷹取祐司、角谷常子、藤井律之、森谷一樹。

唐代道教の研究 班長 麥谷 邦夫

本研究班は、唐代に撰述された道教教理書、とりわけ佛教教理の影響を強く受けた『玄珠錄』等の解讀を通じて、唐代道教の教理上の特徴を解明することを目的として組織された。本年は、『三論元旨』および『大道論』の解讀を終了し、引き續いて『坐忘論』の譯注作成に着手した。

北朝石刻資料の研究(II) 班長 井波 陵一
一月一六日 高湛墓誌 藤井 律之
一月二三日 高湛墓誌 藤井 律之

一月三〇日	高湛墓誌	藤井 律之	年は二、三月に以下の日程で三回の研究班を開催し、終了した。今後、報告論文集を出版する予定である。	二月一〇日	分類語彙表による分類「動詞」
二月 六日	高湛墓誌	藤井 律之		三月 九日	来年度作業の指針
二月一三日	高湛墓誌	藤井 律之		四月二〇日	科研費の作業内譯
二月二〇日	高湛墓誌	藤井 律之	二月 三日 報告者・宮原佳昭「清末民初における讀經教育について」	五月一八日	品詞分類
四月一六日	東魏敬史君碑	向井 佑介	二月一七日 報告者・陳來幸「日本國籍の華商・糖業と海陸産物をめぐる上海・日本・臺灣」		全國漢文教育學會 教科書本文データ集
四月二三日	東魏敬史君碑	向井 佑介	三月 九日 報告者・王也揚「東アジアの民族主義問題…中國および中日關係をテーマとする討論」	五月二五日	品詞分類
五月 七日	東魏敬史君碑	向井 佑介	東アジア古典文獻コーパスの研究	六月 一日	品詞分類
五月一四日	東魏敬史君碑	向井 佑介	二〇一二年は、形態素解析のための漢文コーパスを完成すべく、品詞分類作業を中心に共同研究をおこなった。また、一月一七―一八日に北海道大學で開催された人文科學とコンピュータシンポジウム「じんもんこん二〇一二」で、これまでの共同研究成果の概略を発表した。なお、本研究班では、参加者全員が文献や書籍を見ながら論じ合うというスタイルを取っているため、特定の発表者等は記さないことにする。	六月二二日	品詞分類
五月二一日	東魏敬史君碑	向井 佑介	一月 六日 論語集説コーパス作業	七月 六日	品詞分類
五月二八日	東魏敬史君碑	向井 佑介	一月二〇日 分類語彙表による分類「名詞」・分類語彙表抜粋	七月二〇日	じんもんこん二〇一二に向けて新しい品詞分類に基づく辞書ファイル
一〇月一五日	東魏敬史君碑	向井 佑介	實詞と虚詞（日本漢文へのいびき）	八月 一日	品詞分類
一〇月二二日	東魏廉富等造像記	成田健太郎		九月一四日	じんもんこん二〇一二発表に向けて
十一月 五日	東魏廉富等造像記	成田健太郎			『MeCab』を用いた古典中國語形
十一月二二日	東魏廉富等造像記	成田健太郎			
十一月一九日	東魏廉富等造像記	成田健太郎			
十一月二六日	東魏廉富等造像記	成田健太郎			
十二月 三日	東魏廉富等造像記	成田健太郎			
十二月一〇日	李仲璇修孔子廟碑	藤井 政彦			
十二月一七日	李仲璇修孔子廟碑	藤井 政彦			

態素解析器の改良

品詞分類

一〇月 五日 來年度以降の新規研究班立ち上げに關して

十八史略コーパス作業データ

品詞分類

一〇月一九日 來年度以降の科學研究費申請に關して

漢文文法と訓讀處理『文言文法』

一月 二日 『春色梅兒譽美』における假名の用字法

平安・鎌倉時代における平假名字體の變遷

住民基本臺帳ネットワーク統一文字の變體假名

一月一六日 近代以前の假名體系の性質 JIS Z 八九〇六

二月 七日 共同研究班報告書に向けて

上海博物館藏戰國竹書を讀む―中國古代の基礎史料

『上海博物館藏戰國楚竹書』も第八冊に入り、

子道餓(二月一三日―一月二〇日)、顔淵問於孔子(一月二七日―二月三日)、成王既邦(二月一〇日―二月二四日)、命(四月一三日―五月一日)、王居・志書乃言(五月一八日―六月二二日)、

李頌(六月二九日―七月二〇日)、蘭賦(七月二七日)、有皇將起・婁栗(九月二八日―一〇月二日)と讀み進んで、第八冊を讀了した。第九冊

は未刊行なので、『清華大學藏戰國竹簡』に轉じて、ざっと概観(一〇月一九日)、續いてその第一冊にとりかかり、尹至・尹誥(一〇月二六日―十一月一六日)および程寤(十二月七日―十二月二二日)を讀んだ。

『日占』第一八號(二月一三日)、第一九號(三月三〇日)、第二〇號(一〇月二六日)を發行し、上海博物館藏楚簡の中弓より東大王泊早までの讀書札記、凡物流形のいくつかの字句の解釋、成王既邦と命・王居・志書乃言の配列についての試案、子道餓と東大王泊早を題材にした小話、さらに班員の論文一篇を掲載した。

術數學―中國の科學と占術 班長 武田 時昌
術數學は、自然科學の諸分野と易を中核とする様々な占術とが複合的に絡み合った中國に特有の學問分野である。東アジア世界の科學文化を構造的に把握し、學問的な本質や特色を明確にするには、近代科學の先驅的業績として離散的な發見、發明を時系列に並べて顯彰するだけではなく、當時の科學知識がいかなる役割を擔っていたかを分析的に考察する必要がある。そのような研究を遅滞させている最大の要因は、術數學がほとんど未開拓のままに放置されているところにある。そこで、術數學を總的に研究するプロジェクトを立ち上げることにした。

研究の手がかりとして、近年出土した簡帛資料には先秦から漢代に至る科學や占術に關する論説が満載されていることが注目される。また、日本に残存した『五行大義』『醫心方』や陰陽道資料

にも、中世の術數學の佚文が多數引用されており、きわめて有益である。それらの讀解を通して、術數學の全體像を解明し、理論構造の特色を探る。

二〇一二年は、科學と宗教、宗教の境界領域にわたる文獻を會讀しながら、術數學の形成と展開を檢討する讀書會を毎月二回行った。取り上げたテキストは、張衡『靈憲』、敦煌出土『宅經』、『卜筮元龜』、張泉『醫說』、虞搏『醫學正傳』などである。また、ゲストスピーカーの特別講演と班員による研究發表を行う研究集會を毎月一回開催した。そこでの中心的な論題には陰陽五行説の五音をめぐる考察を取り上げ、『五行大義』卷三、論配聲音の讀解を通して、五味が醫學、本草學や養生思想、食文化などにどのように應用されているのかを全員で討議した。なお、譯注擔當者は、木村亮太、熊野弘子、古藤友子、高井たかね、武田時昌、前原あやのである。

二月二日―四日には韓國術數學學會の主要メンバー六名(李東哲教授(龍仁大學教授) 趙仁哲教授(圓光デジタル大學) 李容周副教授(光州科學技術院) 徐大源教授(忠北大學) 朴權壽教授(忠北大學) 全勇勳講師(ソウル大學))及び國內から任正赫教授(朝鮮大學)を招聘して、日韓術數學ワークショップ二〇一二(據點經費による人文研國際集會、總合テーマ「東アジア術數學研究の現狀と課題」)を開催した。主な内容は、合同討論會(テーマ「東アジア世界の科學と占術」)、シンポジウム(術數學の射程―東アジアの思想・宗教と科學文化)、彦根城博物館所藏琴堂文庫・

吉田神社節分祭追儺式・華麗美術館の見學、資料調査など。

六月二日―四日には、ソウル大學にてソウル大學科學史研究室、奎章閣韓國學研究院と共催で、第一回 Templeton 東アジアの科學と宗教、國際ワークショップ(總合テーマ「東アジア世界の「知」の傳統・科學と思想、宗教のあいだ」)を開催した(韓國 Templeton 財團の研究助成金による)。中國から薩日娜副教授(上海交通大學)を招いたほか、術數學研究室から研究發表者十名、通譯擔當者一名が参加した。三日間の内容は、五セッションに分けて全部で十八名の研究發表、討論會及び奎章閣書庫の觀覽、資料調査を行った。

また、七月二日には、日本科學史支部例會京都支部例會との共催で Gerhard Leiss (ケンブリッジ大學研究員)、杉本舞助教(關西大學) 兩氏を招いて國際研究集會を催し、八月二日―二七日には天地瑞祥志研究會と合同で研究發表會を開催し、陽明文庫、京都府立總合資料館所藏若杉家文書、大將軍八神社所藏皆川家文書を調査した。

この他、國外から馮錦榮(香港大學教授)、孫英剛(復旦大學人文學院副教授)、國內から小會戸洋(北里大學東洋醫學總合研究所教授)、久保輝幸(茨城大學講師)、奈良場勝(暁星高校教諭)の諸氏をゲストスピーカーとして招き、また客員教授に招聘した陳松長教授(湖南大學嶽麓書院副所長)による特別講演を行った。

特別講演、研究發表の演題と發表者は、以下の通りである。

一月 七日	「古醫書の形態變遷―馬王堆から近世和刻本まで」小會戸 洋	「嶽麓秦簡《占夢書》的結構略說」陳 松長
二月 三日	「術數學研究プロジェクト構想」武田 時昌	「朝鮮後期時憲曆の施行と選擇書の變化」全 勇勳
	「近世東アジアの自然哲學的宇宙論」任 正嫻	「日本の天文文物―天球儀を中心に」宮島 一彦
二月 四日	「中國の古代に於ける夢」李 容周	「參同契」と太極圖」徐 大源
	「十八世紀朝鮮王室の儀禮と擇日擇地」朴 權壽	「現代韓國の風水」趙 仁哲
	「類書と術數」李 東哲	「氣」と術數的世界 坂出 祥伸
三月 三日	「五姓法と五音」田中 郁也	
三月 二七日	Galileo and Jesuit Science in 17th Century China」馮 錦榮	
五月 五日	「鄭注月令五畜考」平澤 步	
六月 二日	「澁川春海の分野說」白石 將人	
六月 二日	「東アジア科學史研究の新展開」	「術數學研究プロジェクト」
		「蔡元定と西學」安 大玉
		「周易占に對する丁若鏞の見解」金 永植
		「古代中國における上帝信仰と千畝の戦い」小澤 賢二
		「馬王堆漢墓帛書『陰陽五行』乙篇の構造と思想」名和 敏光
		「『開元占經』に見る太陽觀」李 文揆
		「陰陽五行說の構造的把握」清水 浩子
		「太一」の宇宙論と荀子」鄭 宰相
		「道教における養胎の技法」加藤 千恵
		「道教の身體論と醫學知識―黃庭經及び大洞真經の讀みを中心に」金 志玆
		「黃胤錫の自然學の性格に對する檢討」金 文鎔
		「近世醫書の流通とその行方―小島寶素堂關連資料をめぐって」多田 伊織
		「東アジア食文化の新考察―本草學を手がかりとして」古藤 友子
		「明清居住空間考―八仙卓を中心に」

八月二五日 「天地瑞祥志」 譯出プロジェクト
 Gerthard Leinss
 水口 幹記
 「京大本『下笠元龜』について」
 古藤 友子
 「京都の天文文物とその周邊」
 宮島 一彦
 「人文研所藏術數書と新城新藏」
 武田 時昌
 八月二六日 『若杉家文書』と『天地瑞祥志』
 梅田 千尋

八月二七日 「皆川家文書」と『天地瑞祥志』
 山下 克明
 九月二九日 「モンゴル時代の百科全書的知識」
 宮 紀子
 十一月三日 「古代、中世の緯學と政治思想」
 孫 英剛
 十二月一日 「江戸の易學研究」 奈良場 勝
 東アジア地域間交渉と情報 班長 岩井 茂樹
 一六世紀の東アジアは社會經濟の轉形期を経験した。日本における銀の増産やポルトガル人を嚆矢とするヨーロッパ人の來航などがその背景をなす。利益の追求に促されて、人々は海洋に乗り出して交易に従事した。「天朝」をもって自認する中國の王朝は海禁と朝貢制度を有力な手段として通交秩序を維持しようとしてきたが、この中國中心の秩序は私的な交易の擴大によって動搖することになる。
 この時代、外からの脅威に對處するという觀點から、中國では域外についての知識への希求が高まり、かつてない精度と情報量をもつ著述が出現した。一五五〇年代、蘇州出身の鄭若曾は、倭寇防衛の責務を擔った總督胡宗憲の幕下にあつて、情報の収集と戰略の策定に従事し、『籌海圖編』を編纂した。この共同研究班では、鄭若曾が出身地の蘇州に晩年を過ごした時期に、當局からの要請にもとづいて著述した『江南經略』を素材にして、戰略的觀點からの地域情報、武器や船舶の技術、沙洲の住民、水上居民、「倭寇」や盜賊の情報などの傳播と普及について考察する。この作業

をつうじて、轉形期の東アジアの地域間交渉の特質についての理解が深まることを期待している。
 二〇一二年一月～二月の活動を下に示す。
 一月一七日 會讀『江南經略』蘇松海防圖 藤本 猛
 一月一三日 會讀『江南經略』海防論一 藤本 猛
 二月一四日 會讀『江南經略』海防論二 城地 孝
 二月二八日 會讀『江南經略』海防論四・五 辻原 明穂
 五月 八日 會讀『江南經略』卷一、蘇常鎮江防圖、江防論上 山崎 嶽
 五月二二日 研究報告「管志道と嘉靖帝——明末における專制政治思想——」 岩本眞利繪
 六月 五日 會讀『江南經略』卷一、蘇常鎮江防圖、江防論中、下、他 岩井 茂樹
 六月一九日 研究報告「宋金代における出門稅銀錠について」 市丸 智子
 七月 三日 研究報告「マキキュリ一號事件始末——英國汽船による舟山漁場の警護と上海高等法院開設前の英國領事裁判——」 加藤 雄三
 七月一七日 研究報告「咸寧侯仇鸞と徽州歙縣の人脈——安徽省圖書館藏『舊

寫本王充仇氏家乘」を中心に
― 城地 孝

九月 四日 合評會『長城と北京の朝政』
(城地孝著) 山崎、岩井

九月一八日 研究報告「官卷の研究―清代科
舉考試制度―内容之探討―」
項 巧鋒

一月二三日 研究報告「江南に「宗族」有り
しや―嘉興郷紳李日華より見る
―」
濱島 敦俊

一月二七日 マンジュ人の讀書生活について
―漢文化の受容を中心に―
莊 聲

一月二一日 研究報告「明清交替の科擧と出
仕について―兼ねて明清の間の
連続性問題を論ずる―」
項 巧鋒

地域化する佛教―研究の視點と可能性
班長 船山 徹

下記の通り、各回の研究報告を行い、活發な議
論を交わした。本研究班は本年三月をもって終了
豫定であり、現在、報告論文のとりまとめを企畫
中である。

一月二〇日 倉本尚徳「北朝石刻資料より見
る佛教の地域性(邑義を中心
に)」

二月 三日 末木文美士「日本における禪の
受容―眞福寺所藏寫本を中心
に」

二月一七日 藤井淳「宗祖研究の問題點と可
能性」

三月 二日 ウィッテルン、クリスティアン
「禪とは何か?―燈史資料に見
られる禪宗の自像を中心に」

四月二〇日 船山徹「僧衣の色に見る中國中
世佛教の特徴と中國内の地域的
相違」ならびに「地域化という
視點の新たな可能性に向けて―
初年度の報告を手がかりに」

五月一八日 金志玟「六朝隋唐期の道教儀禮
と佛教・傳經儀禮における三
師・三寶觀念を中心に」

六月二九日 村田濤「寫本の作成過程―佛教
文獻を例として」

七月 六日 稻葉穰「南インド・スリランカ
へのイスラーム初傳について」

九月二一日 宮崎泉「佛教における地域化の
意味―「想」を基點として」

一〇月一九日 熊谷誠慈「チベット佛教の地域
的展開―ブータン佛教を中心
に」

一月一六日 室寺義仁「諸法無我」と「諸
行無常」―アートマンを知る文
化地域から知らない文化地域へ
の佛教教義の傳播受容を巡っ
て」

一月三〇日 麥谷邦夫「『道教義樞』序文に
見える「王家八竝」をめぐる

―道教教理學と三論學派の論法
―

二月 七日 中西久味「大慧禪をめぐる諸問
題―士大夫との交渉より」

東アジア初期佛教寺院の研究 班長 岡村 秀典
東方文化研究所が一九三八―一九四四年に調査
した中國山西省雲岡石窟について、京都大學デジ
タルアーカイブでの畫像公開を目的にガラス乾板
の寫眞を石窟ごとに整理し、水野清一・長廣敏雄
『雲岡石窟』の圖版解説を會讀するとともに、班
員の研究發表を實施した。また、水野・長廣『雲
岡石窟』全一六卷三三冊のPDFを京都大學學術
情報リポジトリに公開したことをうけて、その全
卷の中國語版と未収録寫眞を集めた別巻を新たに
出版する計畫が中國の科學出版社より提案があり、
その編集に向けた檢討會も實施した。開催した研
究會は以下のとおり。

一月一〇日 雲岡石窟第六洞 田中 健一

一月二四日 雲岡石窟第六洞 田中

二月二八日 雲岡石窟第六洞 田中

三月一三日 雲岡石窟第六洞 田中

三月二七日 雲岡石窟第六洞 田中

四月一〇日 雲岡石窟第六洞 田中

四月二四日 雲岡石窟第六洞 田中

五月 八日 雲岡石窟第七洞 高橋早紀子

五月二二日 雲岡石窟第七洞 高橋

六月一二日 雲岡石窟第六洞の位置付けをめ

開催日	開催場所	講師	題目
六月二六日	雲岡石窟第七洞	安藤 房枝	ぐる諸問題
七月一〇日	雲岡石窟第七洞	高橋	二月一〇日 張傳宇「一九三八一—一九四五年日本の對廣州貿易の再建と統制」
七月二四日	雲岡石窟第七洞	高橋	二月二四日 項巧鋒「清における科擧家族と婚姻との研究・潘祖蔭家族を中心に」
一〇月 九日	雲岡石窟第七洞	高橋	三月 二日 楊韜「一九四〇年代の生活書店について・國共兩黨とのかかわりを中心に」
一〇月二三日	雲岡石窟第七洞	高橋	四月二七日 石川禎浩「一九五〇年代の中共黨史研究と雜誌『黨史資料』」
十一月三日	雲岡石窟第七洞	高橋	五月一八日 小野寺史郎「清末民初のミリタリズムとその制度化の課題」
十一月二七日	雲岡石窟第七洞	高橋	六月 一日 武上眞理子「近代日本と中國におけるシヴイル・エンジニアリング」「土木」への翻譯と工學の導入をめぐる」
二月 四日	雲岡石窟第一〜第四洞補遺	岡村	六月一五日 森川裕貫「一九一〇年代における張東蓀の政治制度構想」
二月一一日	雲岡石窟第七洞	高橋	六月二二日 貴志俊彦「トポスとしての東アジアを結ぶ―日中國交正常化後の海底ケーブル建設をめぐる」
二月一八日	雲岡石窟第五・第六洞補遺	岡村	七月一三日 江田憲治「中共理論闘争史序説」
			九月二八日 徐小潔「日貨排斥運動からみる中國社會の變容」
			一〇月二二日 瀨邊啓子「文革期の『湖北文藝』」
			一〇月二六日 森岡優紀「中國における傳記の生成」
			十一月 九日 宮内肇「廣東農民運動期の民團に關する一考察・珠江デルタ地域を中心に」
			十一月三〇日 楠原俊代「當代散文の研究…記憶の中の中國革命史再構築の試み」
			二月一四日 宋玉梅「米洲致公堂と孫文」
			南アジア北邊地域における文化交流の諸相
		班長 稻葉 穰	本研究室は、南アジアが中央アジア、西アジアと接觸する境界領域周邊で、古代から近代にかけて生じた接觸・交流・衝突・融合の様々な事例を可能な限り網羅的に検討し、前近代における文化交流をどのように捉えうるかを考察することを目的として組織された。本年は、南アジア北邊地域における古代から近代にかけての文化交流、文化變容にかかわる研究報告と並行し、一世紀半ばに著された Gardizi の歴史書 <i>Zayn al-Akbar</i> におさめられた中央アジア民族誌に關する記述の會讀と譯注作成を行った。これは一二世紀以降のインド・イスラム時代において、支配者たるテュルク (Turks) がどのような存在として理解されたのかを考察する材料とするためである。各回の内容は下記の通り。
			なお、本研究室は所定の期間を終え二〇一二年三月末を以て終了した。研究班の成果は、下記の

通り三月に行った国際シンポジウムで報告した他、数回に分けて、東方學報に個別論文として発表する豫定である。

各自によるテーマに即した研究報告と、九一〇世紀の中央アジアの地理について述べたアラビア語地理書寫本の會讀を交互に行っている。各回の内容は下記の通り。

一月一三日 會讀「Zayn al-Akbar」
稲葉 穰・中西 龍也

四月一三日 會讀「Zayn al-Akbar」
宮本 亮一

一月二七日 會讀「Zayn al-Akbar」
中西 龍也

四月二七日 研究報告「ガンダーラ美術年代學と技術様相の關係」
内記 理

二月一〇日 研究報告「Some Remarks on Bactrian Kadagstan」
宮本 亮一

五月一日 研究報告「イスラームと中華の對話、その歴史的展開——一九世紀

「Temporal Decline of Buddhist Sites in Tokharistan」
岩井 俊平

雲南の「聖戰」をめぐる對話を中心に」
中西 龍也

三月 五日・六日 國際シンポジウム
「Afghanistan Meeting 二〇〇一」
一： Between Sogdiana and Gandhara in the Pre-Islamic Period」

五月二五日 研究報告「四世紀〜八世紀のバクトリアとソグディアナの服飾」
影山 悦子

三月二三日 研究報告「フロンティアを巡る諸問題」
稲葉 穰

六月 八日 會讀「Kitab al-Buldan」
稲葉 穰

イスラムの東・中華の西——前近代ユーラシアにおける文化交流の諸相
班長 稲葉 穰

六月二三日 會讀「Kitab al-Buldan」
稲葉 穰

本研究班は、西のイスラム世界と東の中華世界の間の前近代における交渉、交流について一九世紀以來蓄積されてきた、いわゆる東西交渉史研究のバイオニア達があちたてたパースペクティブを、最新の發現資料に基づいて検討、檢證し、古代から近代におよぶ文化交流と文化變容のあり方を多角的に解明することを目指す。具體的には、班員

七月一三日 研究報告「一五世紀ヘラートにおける書記文化の繼承と變容——インシャー作品の書記術論と書簡作成既定をもとに——」
杉山 雅樹

七月二七日 會讀「Kitab al-Buldan」
川本 正知

七月二七日 會讀「Kitab al-Buldan」
川本 正知

九月二八日 會讀「Kitab al-Buldan」

元代雜劇の研究
本年度も昨年度に引き續き、『元刊雜劇三十種』の會讀と譯注作成を行った。會讀箇所と擔當者は以下のとおりである。

一〇月二日 會讀「Kitab al-Buldan」
二宮 文子

一〇月二七日 「焚兒救母」雜劇 第四折前半
擔當：土屋 育子

十一月一日 「焚兒救母」雜劇 第四折後半
擔當：松浦 恒雄

十二月二日 「焚兒救母」雜劇 第三折後半
擔當：高橋 文治

近現代中國における社會經濟制度の再編
本研究班は、前近代中國の社會・經濟を規定してきた慣習・秩序・常識といった「制度」が、近

一月二日 「焚兒救母」雜劇 第一折後半
擔當：小松 謙

一月四日 「焚兒救母」雜劇 第二折前半
擔當：佐藤 晴彦

一月六日 「焚兒救母」雜劇 第二折後半
擔當：高橋 繁樹

一月九日 「焚兒救母」雜劇 第三折前半
擔當：竹内 誠

一月二八日 「焚兒救母」雜劇 楔子・第一折前半
擔當：金 文京

一月三十一日 「焚兒救母」雜劇 第一折後半
擔當：金 文京

二月一日 「焚兒救母」雜劇 第二折後半
擔當：高橋 文治

二月三日 「焚兒救母」雜劇 第三折後半
擔當：高橋 文治

二月五日 「焚兒救母」雜劇 第四折後半
擔當：松浦 恒雄

現代においていかに變容したかを多角的に検討することを目的とし、二〇一二年四月に發足、四一二月に以下の日程で一〇回の研究班を開催した。

四月二〇日 報告者・村上衛「共同研究班『近現代中國における社會經濟制度の再編』をはじめめるにあたって―鎮江における通過貿易問題を例に」

五月二一日 報告者・上田貴子 コメントイター・吉澤誠一郎「奉天の近代化と奉天同善堂」

五月二五日 報告者・秋田朝美 コメントイター・富澤芳亞「棉麥借款からみた日中關係の一考察―棉花を中心に」

六月 八日 報告者・園田節子 コメントイター・菊池秀明「南北アメリカにおける草創期華僑コミュニティの形成と華商」

六月二九日 報告者・吉田建一郎 コメントイター・小島泰雄「中華人民共和國初期における養豚振興の模索」

一〇月 五日 報告者・郭まいか コメントイター・本野英一「民國期の上海公共租界における會審公堂の組織と會審制度」

一〇月一九日 報告者・姜珍亞 コメントイター・岡本隆司・石川亮太「東

アジアにおける廣東人ネットワーク―在韓華商同順泰の活動を中心に」

一月二日 報告者・木越義則 コメントイター・岡本隆司「近代中國と廣域市場圏―海關統計によるマクロのアプローチ」

一月一六日 報告者・烏蘭其其格 コメントイター・岩井茂樹「清代絹織物業における主體の變遷とその意義―官營織造局、都市民間機業、郷鎮農村機業」

一月二七日 報告者・山本一 コメントイター・伍躍「一八世紀前半、督撫による地方官選任規定とその實態」

東アジア譯學書の研究 班長 藤本 幸夫

本研究は、東アジア譯學書の一種である朝鮮の『朴通事諺解』を會讀し、譯注を作成すること

を目的とする。本年度の會讀箇所と擔當者は以下のとおりである。また二月二二日に、在日中のカナダ、ブリテイシユ・コロンビア大學アジア研究センターのロス・キング教授を招聘し、「歐米における韓國語學研究の現状」と題して講演をしていただいた。そのほか、七月二八・二九兩日、韓國ソウルの同徳女子大學で開催された第四回譯學書學會國際學術會議に、班員多數が参加し、研究發表を行った。

四月二一日 九四話・九五話 擔當・竹越孝

六月三〇日 六一話・六二話 擔當・金文京
七月二一日 二七話・二八話 擔當・船田善之

一〇月二〇日 七三話・七四話 擔當・玄幸子
十一月二四日 四三話・四四話 擔當・木津祐子

十二月二二日 八八話 擔當・佐藤晴彦 キング教授講演

人文學研究部
トラウマ經驗の組織化をめぐる領域横斷的研究―物語からモニュメントまで 班長 田中 雅一

トラウマやPTSDなどの醫療用語が、日常的に使われるようになって久しい。心理學や精神醫學用語が普及していった背景には、わたしたちの世界が「脱神學化」してきたという事實がある。このことをふまえて本研究では、トラウマをより

廣い意味で苦惱 (suffering) や痛み (pain) とみなし、この苦惱に對し人びとがどのような形で對峙し、克服しようとしてきたかについて様々な事例を通して考えようとしてきた。

今年度は研究會發足三年目に當たるため、これまでの二年間で十分に議論されてこなかった社會の心理學化というテーマについて重點的に議論を行うことにした。このテーマに關連し、ゲストスピーカーとして、小池靖氏 (立教大學)、樞村愛子氏 (愛知大學) を招聘し、集中的に議論を重ねることができた。

このテーマを中心に、平成二四年度は一月三〇

日、四月九日、四月二十三日、五月七日、五月二十八日、六月四日、六月十八日、七月九日、一〇月二十九日、十一月二十六日、十二月十七日に研究会を開催した。

さらに、本研究會で會讀を行ってきたPTSD関連の重要文献の著者であるアラン・ヤング氏（マッギル大學）を招聘し、國際シンポジウム「精神病理からみる現代―うつ、ひきこもり、PTSD、發達障害」を六月三〇日に開催することができた。ヤング氏の他に、マリー・ジャン・ソレ氏（トゥールーズ第二大學）、北中淳子（慶應義塾大學）、堀口佐知子（テンブル大學）、古橋忠晃（名古屋大學）が発表し、PTSDを含めた病理から現代社會を考えるためのきわめて收穫の多いシンポジウムとなった。

こうした研究の成果をさらに深化・發展させるために、來年度は個別のテーマ毎に小規模のシンポジウムを組織し、これらのシンポジウムでの議論を中心に本研究會を組織・運営していく豫定である。

日中戦争・アジア太平洋戦争期朝鮮社會の諸相

班長 水野 直樹

日中戦争勃發から日本敗戦までの戦時期に朝鮮において實施された「皇民化政策」やその下での朝鮮社會の實相を明らかにすることを目的にして、研究發表、資料紹介、關連研究の紹介・書評などの形で進めている。とりわけ、この時期に關する資料が少ないため、埋もれている資料の探索・調査・整理に重點をおいている。

日本の文學理論・藝術理論

班長 大浦 康介

二年目にあたる平成二四年は、前年に引き續き、日本の主要な文學・藝術理論關係の文献（とくに昭和期の文献）を班員全員で讀み、それについて討論するという會讀形式で研究会を開催した。また、石原千秋、野網摩利子、齋藤希史の各氏をゲストとして招き、文學理論關係の報告をしていた。

日本・アジアにおける差異の表象

班長 竹澤 泰子

本研究班は、人種表象をめぐる社會的リアリティを、「見えない人種」の非視覚表象、人種の科學表象と學知、「混血／ミックス」表象の三つのサブテーマに着目して、分野横斷型の共同研究を進めている。本年度は通常の月例研究会に加えて、文理融合のワークショップ、日系アメリカ人に關する日米合同ワークショップ、日米の映畫に見る「日本人」の表象、論文集執筆のための合宿などを行った。本年の特筆すべき成果は、一二月に國立京都國際會館において開催した國際シンポジウム「人種神話を解體する」であり、二五名にのぼる登壇者が内容の濃い報告をしただけでなく、延べ三五〇名以上のフロアの参加者とも活發な質疑應答を行うことができた。その成果として、シンポジウム報告書を三月に刊行した。

近代古都研究

班長 高木 博志

最終年度の本年度は、近代における古都和城下町の「歴史都市の歴史性」の問題を中心に据えて、夏までに研究報告を積み重ね、それ以降、共同研

究報告書のとりまとめに入った。共同研究報告書は、一八篇の論考からなる、『近代日本の歴史都市―古都和城下町』（思文閣出版、二〇一三年）として刊行した。

近代天皇制と社會

班長 高木 博志

本研究班では、近世後期から近現代までを見通して、町や村といった地域や、文化・宗教・思想・教育・社會運動・民俗などを視野に入れた広い意味での「社會」と天皇制との關係を考えてゆきたい。また政治史・教育史・文化史・思想史・運動史・美術史・植民地研究・民俗學・地域史などの諸分野の研究者とともに、初年の今年度は、比較的少人数で十分議論できるように心がけた。七月には尾谷雅彦氏の案内で南河内楠公・南朝史蹟の巡見を行った。

第一次世界大戦の總的研究

班長 山室 信一・岡田 暁生

本年は一七回の研究会を開催した。通常の研究報告の他、海外からの講演者を迎えての公開研究会も實施した。二〇一〇年から始めた小シンポジウムでは取りまとめに向けた論點整理などを重ねた。また、中間報告の意味をもつシリーズ「レクチャー 第一次世界大戦を考える」（人文書院）の公刊を續けると共に最終報告書・論集四冊（岩波書店）の編集作業も終えた。さらに、ベルリン自由大學を據點として進行しているInternational Encyclopedia of the First World War 一九一四―一八プロジェクトへの寄稿も進めている。

灌頂と即位の文化史

班長 藤井 正人

本共同研究(二〇一・四一・二〇一四・三)は、共同研究「王権と儀禮」(二〇〇五・四一・二〇一・三)を進展させるため、テーマを新たにして発足させたものである。前共同研究では王権とそれに關わる儀禮全般を対象としてきたが、この共同研究では、古代インドなどにおいて即位や入門の儀禮で中心的な行爲となつてゐる「灌頂」に焦點をあて、その行爲の基本形態、類型、變化、傳播、異文化との混交などに關して、文化史的アプローチから研究する。研究方法としては、各種事例の比較研究を進めるとともに、他分野の研究者に負擔をかける形で文献資料の基礎研究をも行なう。具體的には、課題に關する研究報告を集行的に行なう「研究集會」と、古代インドの王即位に關するサンسكريット資料の校訂と譯注を行なう「會讀」という二種の研究會を、切り離した形で開催して研究を進めてゐる。二年目の本年度(二〇二二)、タントラの第一人者であるオックスフォード大學サンダーソン教授を招いて、班員を中心に、「古代・中世インドにおける潔齋、入門・入信、即位の諸儀禮」をテーマにした國際シンポジウムを開催した。

アジアの通商ネットワークと社會秩序

班長 籠谷 直人

第一年度にあたる二〇二二年は、おもに華人によつて書かれた史料についてのレビューを中心に、研究會を開催した。二〇二二年一月より人文科學研究所に招へいした、レオナルド・ブ

リュッセイ氏(ライデン大學)、聶德寧氏(廈門大學)とともに華僑華人らの公文書「公案簿」、「開吧歴史代史」などの史料について検討をすすめた。これらの漢文(福建語)の資料は、バタヴィア(現在のジャカルタ)の華人自治組織であった「公館」の公文書群であり、現在はライデン大學の東洋史研究センターに保管されてゐる。文書からは、オランダ東インド會社の時代からオランダ植民地の時代にかけてのオランダのジャワ統治が、華人との協働によるものであることがわかる。またオランダの植民地統治における華人の「徴稅請負」制度は、こうした資料をとつてその實態を読み解くことができる。

色道書の言語をめぐる文明史的研究

班長 横山 俊夫

安定社會が閉塞せず、文にして明なる状態に赴くかどうかは、その社會を構成する諸要素を適切に交わり續けさせる媒介があるかどうかによる。とりわけ問われるのは、言語がはたす媒介機能である。この研究では、一七世紀末からの安定期の京、大坂に榮えた丸腰の閉鎖空間である遊里を、文明化の要素をはらむ安定社會のいわば小規模實驗例と見立て、そこでの言語の虚實柔剛明暗を觀察、そのはたらきの人類史的價值について考える。資料として、西水庵無底居士の「難波鉦」(大坂、一六八〇)を選び、そこに記された言語の諸相を文明化とのかかわりで検討する。そのことにより、當班の舊組織「文明と言語」班が試みた同書の校訂試譯を修補するとともに、未校部分を加

え、独自の意味づけを持たせた一篇を編もうとしている。三年目は、傾城や大盡よりも、媒介としての働きが期待される人びとの言語に注目する機會が増えた。なお、「難波鉦」輪讀以外の研究報告では、各班員が屬している多様な現代學術分野での特殊な言語習慣の文明史的批評を提起した。

また、本年は上記「文明と言語」班の報告書の最終入稿に向けて、當研究班の成果もとり込むかたちで、共同編集作業を遂行した。その結果、「ことばの力―あたし文明を求めて―」を、平成二三年度末に、人文科學研究所ならびに京都大學學術出版會から刊行することになった。

班員：岩城卓二、菊地 暁、古勝隆一、武田時昌、田中祐理子(以上、所内) 梶 茂樹、木村大治、鹽瀬隆之、全 容範、田邊明生、松田文彦、山極壽一(以上、學内) 上村多恵子(日本エッセイストクラブ)、遠藤 彰(立命館大)、後藤靜夫(京都市立藝術大)、齋藤清明(文筆業)、廣瀬千紗子(同志社女子大)、深澤一幸(大阪大)

啓蒙とフランス革命・一七九三年の研究
班長 富永 茂樹

二〇二二年の前半は昨年にひきつづいてロベスピエールやサンジユストの議會における演説のテクストの會讀と議論を行うとともにベルトラン・ピノシユ(パリ第一大學)に講演いただき、後半にはパトリス・ゲニフエー(社會科學高等研究院)の講演をはじめ、班員數名による一九九〇年代以後(つまりフランス革命二〇〇周年からあと)に出た研究書ないし論文の紹介をおして、

啓蒙とフランス革命の連続ないし断絶にかかわる問題の理解を深めることができた。

近代日本と異文化接觸―「同時代化」を生きた人々の記録― 班長 ヴィータ、シルヴィオ

「近代日本と異文化接觸―同時代化」を生きた人々の記録」というタイトルで行った二年間の研究会の成果に立脚し、研究成果の最終的報告を視野に入れつつ、本年はテキスト會讀と資料整理を中心とした活動を行った。また、近代日本を訪れたヨーロッパ人のみならず同時期に歐米に渡った日本人の旅をも対象に含め、文化接觸と交流の場としての近代に關する研究を進めた。

個人研究

人文學研究部

前近代日本の文明史的研究

横山 俊夫

近代東アジアにおける日本の法と政

山室 信一

フランス革命と近代的主体の成立

富永 茂樹

近代朝鮮の政治と社會

水野 直樹

在日米軍を中心とする軍事共同體の人類學的研究

田中 雅一

文學理論の研究

大浦 康介

ヴェーダ文獻の生成と傳承の研究

藤井 正人

人種・エスニシティ論

竹澤 泰子

戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク

籠谷 直人

近代天皇制の文化史的研究

高木 博志

近代日本の藝術と西洋

高階繪里加

現代社會における生物學・生命科學

加藤 和人

音樂におけるロマン派とメロドラマ的音樂

岡田 暁生

一九世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァティズム

小關 隆

近世ヨーロッパの歴史叙述と政治思想

王寺 賢太

幕末期の畿内・近國社會

岩城 卓二

精神分析的知を思想的に位置づける試み

立木 康介

ザガフカスの「義賊」と戦争

伊藤 順二

南インドにおけるプータ祭祀に關する人類學的研究

石井 美保

近代日本民俗誌システムの研究

菊地 暁

近代西洋醫學發展史研究および身體論

田中祐理子

近代詩の虚構性

久保 昭博

再構築されるオリシヤ崇拜―異なる「人種・宗教」をとりこむアフリカ系アメリカ人の社會運動―

小池 郁子

戦前期日本の大衆社會・文化

黒岩 康博

古代インド家庭儀禮の研究

梶原三恵子

フイリピンにおける差異と共同性の構築

日下 涉

啓蒙と文學―アドルノ美學における「人間性」の位置づけ―

藤井 俊之

東方學研究部

近代中國の財政と社會

岩井 茂樹

近代中國の綿紡織業

森 時彦

道教思想研究

麥谷 邦夫

敦煌寫本の言語史的研究

高田 時雄

中國古代中世の法制

富谷 至

中國の小説、演劇及び説唱文學の歴史

金 文京

清代の文化と社會

井波 陵一

中國科學の思想史的考察

武田 時昌

先秦時代の金文

淺原 達郎

古代中國の考古學研究

岡村 秀典

イスラーム東漸史の研究

稲葉 穰

川西走廊の漢藏諸語の記述言語學的研究

池田 巧

インド・中國における佛教の學術と實踐

船山 徹

佛教研究知識ベース―禪佛教を例として

ウィッテルン、クリステイアン

文字コード理論

安岡 孝一

中國共產黨史の研究

石川 禎浩

秦漢時代の制度史

宮宅 潔

高麗官僚制度研究

矢木 毅

中國注釋學史研究

古勝 隆一

華南沿海の社會經濟制度の變容

村上 衛

東アジア佛教美術史の研究

稲本 泰生

文字定義情報に基づく文書表現系に關する研究

守岡 知彦

中國古代中世の官制史

藤井 律之

モンゴル時代の文化政策と出版活動

宮 紀子

明代後期北虜南倭時代の中國社會

中國家具とその使用に關する研究

中國唐宋の文學批評

中國中世の考古學研究

近代中國におけるナショナリズムと政治シンボル

中國北魏時代の佛教石窟寺院

六朝隋唐期の宗教研究

中國古代における領域支配の研究

山崎 岳
高井たかね
永田 知之
向井 佑介
小野寺史郎
安藤 房枝
金 志玟
土口 史記

事業概況

・セミナー・シリーズ(人文研アカデミー)

二〇一二年一月 於 本館共通一講義室

政治を考える

一月二一日 ルソー 桑瀬章二郎 編『ルソーを

學ぶ人のために』仲正昌樹 著『今

こそルソーを読み直す』をめぐって

立教大學文學部准教授

桑瀬章二郎

金澤大學法學類教授

仲正 昌樹

司會 王寺 賢太

・人文研アカデミー・シンポジウム

西川長夫著『パリ五月革命 私論 轉換點とし

ての六八年』刊行記念『日本からみた六八年五

月』

二〇一二年二月五日

於 京都大學百周年時計臺

記念館國際交流ホール

第一部 對論「私」の叛亂

評論家 長崎 浩

立命館大學名譽教授 西川 長夫

第二部 シンポジウム 轉換點としての六八年

一橋大學名譽教授 安丸 良夫

東京大學名譽教授 NPO 法人理事長

文學研究科教授 伊藤 公雄

文藝評論家 中島 一夫

總合司會 神戸大學教授 市田 良彦

・SENDAI 漢籍 SEMINAR

二〇一二年三月九日

於 東北大學百周年記念會館

「川内秋ホール」

古籍の歸還もしくは孝經の蒐集―竹内義雄名譽教

授舊藏書と狩野文庫―

講師 東北大學教授 三浦 秀一

討論者 京都大學准教授 宇佐美文理

ふみといしぶみの六祖慧能―常磐大低舊藏拓本コ

レクションを中心として―

講師 東北大學准教授 齋藤 智寛

討論者 京都大學准教授 古勝 隆一

・退職記念講演會

二〇一二年三月一四日

於 京都大學百周年時計臺

記念館國際交流ホール三

文明學への道

横山 俊夫

清末經濟思想初探

・連續セミナー(人文研アカデミー)

二〇一二年五月、六月 於 本館セミナー室一

二〇世紀前半 東アジアにおける人の移動

五月一七日 東アジアにおける人の移動・概觀

水野 直樹

五月二四日 日本から朝鮮へ―在朝日本人社會

の形成と消滅―

佛教大學歷史學部准教授

李 昇燁

五月三一日 朝鮮から日本へ―在日朝鮮人社會

の形成と變容―

國際日本文化研究センター准教授

松田 利彦

六月 七日 中國から朝鮮へ―朝鮮在任華僑の

歴史―

成美大學經營情報學部教授

李 正熙

六月一四日 朝鮮から中國東北へ―帝國日本と

中國朝鮮族の歴史―

水野 直樹

・特別講演會(人文研アカデミー)

二〇一二年五月一八日 於 本館セミナー室一

一八九三年シカゴ萬國宗教會議と日本佛教

講師 高野山大學教授 奥山 直司

・夏期公開講座(人文研アカデミー)

二〇一二年七月七日 於 本館共通一講義室

名作再讀―鐵道―いま讀んだらこんな面白い

(七)

「地下鐵のザジ」(レーモン・クノー) 久保 昭博

「點と線」(松本清張) 安岡 孝一

「鐵道事故」(トーマス・マン)

クリステイアン・ウィッテルン

・連續セミナー(人文研アカデミー)

二〇一二年九月、一〇月

於 本館セミナー室一

交錯するアジア―前近代ユーラシアにおける文化交流の諸相

九月二七日 世界の屋根を越えて…ガンダーラ、アフガニスタン、パミール

稲葉 穰

一〇月 四日 信仰か觀光か…南アジアのストーリー

ファイ聖者廟 二宮 文子

一〇月二一日 チベット文化の誕生…諸文化が交錯するところ

神戸市外國語大學客員研究員・非常勤講師 岩尾 一史

一〇月一八日 變わるもの・變わらないもの…トルコ共和国のアラビア文字碑文

文學研究科教授 井谷 鋼造

・文學カフェ(人文研アカデミー)

二〇一二年十一月二四日

於 本館共通一講義室

公開句會「東京マツハ」番外編 京大マツハ 第二藝術の逆襲

講師 ゲーム作家 立命館大學映像學部教授

米光 一成

小説家 長嶋 有

小説家 藤野 可織

俳人 堀本 裕樹

司會 日曜文筆家 千野 帽子

・東アジア人文情報學研究センター講習會

・二〇一二年漢籍擔當職員講習會(初級)

第一日(一〇月一日)

オリエンテーション 富谷 至

漢籍について(四部分類概説を含む)

カードの取り方―漢籍整理の實踐 井波 陵一

第二日(一〇月二日) 土口 史記

工具書について 高井たかね

實習を始めるにあたって 梶浦 晉

漢籍目録カード作成實習

第三日(一〇月三日) 目録檢索とデータベース檢索 安岡 孝一

漢籍データ入力實習(一)

第四日(一〇月四日) 和刻本について 宇佐美文理

漢籍データ入力實習(二)

第五日(一〇月五日) 朝鮮本について 矢木 毅

實習解説 土口 史記

情報交換 井波 陵一

・二〇一二年漢籍擔當職員講習會(中級)

第一日(一〇月二九日) 富谷 至

オリエンテーション

經部について

文學研究科教授 宇佐美文理

叢書部について 藤井 律之

叢書と漢籍データベース 安岡 孝一

第二日(一〇月三〇日) 史部について 宮宅 潔

漢籍データ入力實習(一)

第三日(一〇月三一日) 子部について 武田 時昌

漢籍データ入力實習(二)

第四日(十一月一日) 集部について 道坂 昭廣

人間・環境學研究科教授

漢籍データ入力實習(三)

第五日(十一月二日) 漢籍關連サイトの利用について 大西 賢人

文學研究科閲覽掛

實習解説 土口 史記

情報交換 井波 陵一

所員動靜

。白井哲哉特定助教(新學術領域研究)は、辭任の上(二月二九日付)、京都大學研究國際部特定専門業務職員(リサーチ・アドミニストレーター)就任。

。向井佑介助教(附屬東アジア人文情報學研究センター)は、辭任の上(三月二二日付)、京都府立大學文學部歴史學科講師就任。

- 。加藤和人准教授（人文學研究部）は、辭任の上（三月二日付）、大阪大學大學院醫學系研究科教授就任。
 - 。梶原三恵子助教（人文學研究部）は、辭任の上（三月二日付）、東京大學大學院人文社會系研究科准教授就任。
 - 。横山俊夫教授（人文學研究部）は、定年により退職（三月二日付）。
 - 。森時彦教授（東方學研究部）は、定年により退職（三月二日付）。
 - 。三成壽作特定研究員（科學研究）は、辭任の上（三月二日付）、大阪大學大學院醫學系研究科特定研究員就任。
 - 。栗田奈津子（舊姓 山本奈津子）特定研究員（産官學連携）は、辭任の上（三月二日付）、大阪大學大學院醫學系研究科特定研究員就任。
 - 。吉澤剛特定講師（新學術領域研究）は、辭任の上（三月二日付）、大阪大學大學院醫學系研究科准教授就任。
 - 。高木博志准教授（人文學研究部）は、當研究所（人文學研究部）教授に昇任（四月一日付）。
 - 。ウィッテルン・クリスティアン准教授（附屬東アジア人文情報學研究センター）は、當研究所（附屬東アジア人文情報學研究センター）教授に昇任（四月一日付）。
 - 。武田時昌教授（附屬東アジア人文情報學研究センター）は、東方學研究部に配置換（四月一日付）。
 - 。山崎岳助教（附屬東アジア人文情報學研究センター）は、東方學研究部に配置換（四月一日付）。
 - 。ター）は、東方學研究部に配置換（四月一日付）。
 - 。麥谷邦夫教授（東方學研究部）の、附屬東アジア人文情報學研究センター長併任を解除（四月一日付）。
 - 。富谷至教授（東方學研究部）は、附屬東アジア人文情報學研究センター長を併任（四月一日～二〇一三年三月三十一日）。
 - 。藤原辰史東京大學大學院農學生命科學研究科講師を准教授に採用（四月一日付）。
 - 。土口史記を助教（附屬東アジア人文情報學研究センター）に採用（四月一日付）。
 - 。藤本幸夫 麗澤大學言語研究センター長は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一三年三月三十一日）。
 - 。JACQUET, Benoit-Marcel Maurice フランス國立極東學院京都支部長は、客員准教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一三年三月三十一日）。
 - 。加藤和人 大阪大學大學院醫學系研究科教授は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一三年三月三十一日）。
 - 。武上眞理子 人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附屬現代中國研究センター、四月一日～二〇一三年三月三十一日）。
 - 。VITTA, Silvio イタリア國立東方學研究所所長は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一三年三月三十一日）。
 - 。稻本泰生奈良國立博物館學藝部教育室長を准教授（東方學研究部）に採用（五月一日付）。
- 外國人研究員
- 。VOGELSANG, Kai ハンブルグ大學教授
尙書和刻本等の研究
（文化連關研究客員部門）
受入教員 富谷教授
期間 一月三十一日～七月三〇日
 - 。FANSELOW, Frank ブルネイ・ダルサラーム大學 學科長
アジアにおける民族紛争と表象との相互關係についての研究
（文化生成研究客員部門）
受入教員 田中教授
期間 五月七日～九月一四日
 - 。RAVINA, Mark エモリー大學教授
日本近世史・近代史
（文化連關研究客員部門）
受入教員 岩城准教授
期間 八月一五日～二〇一三年一月一〇日
 - 。薩日娜 上海交通大學科學史與科學文化研究院准教授
東アジアにおける西洋數學受容の研究
（文化生成研究客員部門）
受入教員 武田教授
期間 一月七日～二〇一三年二月六日
 - 。BLUSSE, Leonard ライデン大學 名譽教授
アジアの通商ネットワークと社會秩序

(文化生成研究客員部門)

受入教員 籠谷教授

期間 一月一日～二〇一三年五月一日

招聘外國人學者

。張 景俊 高麗大學人文大學國語刻文科副教授
日本と韓國の漢文訓讀に使用される符號の比較研究

受入教員 金教授

期間 四月一日～八月五日

。林 素清 中央研究院歷史語言研究所研究員
中國古代青銅器の銘文研究

受入教員 岡村教授

期間 一〇月二九日～十一月一日

。聶 德寧 廈門大學南洋研究院教授
バタヴィア・カピタン文書による華人通商ネットワーク研究

受入教員 岩井教授

期間 一月一日～二〇一三年五月三十一日

外國人共同研究者

。 Scherrmann, Sylke Ulrike

青島舊藏ドイツ語文獻中の法制關係資料の調査

受入教員 岩井教授

期間 二〇一一年四月一日～二〇一三年三月三十一日(繼續)

。李 大和 建國大學校韓國臺灣比較史研究所研究員

戦時下朝鮮の防空體制と朝鮮社會の變容

受入教員 水野教授

期間 二〇一一年四月二二日～二〇一三年二月二八日(繼續)

。金 惠淑 建國大學校韓國臺灣比較史研究所研究員
植民地朝鮮の商取引における度量衡制の混在様相に關する研究

受入教員 水野教授

期間 四月一日～二〇一三年三月三十一日

。許 瓊丰 臺灣中央研究院臺灣史研究所・博士
戰後神戸における臺灣人商人の眞珠事業―その經濟的・社會的活動

受入教員 籠谷教授

期間 七月四日～八月三十一日

。 STORM, Kerstin ミュンスター大學・P D 研究員
法律と文學・晩唐における「判」のレトリック

受入教員 富谷教授

期間 七月一七日～二〇一三年一月二六日

。 TAJAN, Nicolas トゥールーズ第二大學・博士課程學生
日本の「ひきこもり」についての心理學的・社會文化史的研究

受入教員 立木准教授

期間 十月五日～二〇一三年十月四日

外國人研究生

。 TAJAN, Nicolas

社會的ひきこもりの日佛比較研究

受入教員 立木准教授

期間 二〇一一年四月一日～二〇一二年八月三十一日(繼續)

。 PHAN, Cam Van Thi

悔恨の儀式・前近代中國におけるテキストとしての傳統から宗教儀禮へ

受入教員 船山教授

期間 二月一日～二〇一三年一月三十一日

。陳 彦君
岡倉天心におけるアジア主義の再考

受入教員 山室教授

期間 四月一日～七月三十一日

出版物

紀要

東方學報 八七冊(紀要第一七〇冊)

二〇一二年一月一日刊

東洋學文獻類目二〇〇九年度

二〇一二年二月二九日刊

ZINBUN number 四三三

二〇一二年三月刊

人文學報 第一〇二號(紀要第一六九冊)

二〇一二年三月三〇日刊

研究報告その他

眞諦三藏研究論集 船山徹編

二〇一二年三月二五日刊

- 東方學資料叢刊 第二〇冊
二〇一二年三月三〇日刊
ことばの力 横山俊夫編著
二〇一二年三月二一日刊
日本東方學(第二號) 日本京都大學人文科學研
究所主編
二〇一二年四月二一日刊
所報人文 第五九號
二〇一二年六月三〇日刊
シンポジウム「情報と構造のメタデータ」
(二〇一二年二月二一日實施)
二〇一二年二月二一日刊
東洋學へのコンピュータ利用 第三回研究セ
ミナー
(二〇一二年三月二六日實施)
二〇一二年三月二六日刊
イタリア國立東方學研究所大會「ヨーロッパ文
書館から描く近世日本」
(二〇一二年九月二八日實施)
二〇一二年九月二八日刊